多世代共創社会のまちづくりマニュアル

～協議体編～

CONTENTS

はじめに……❷
1. 協議体に関わるそれぞれの役割…❸
2. 協議体メンバーを集めるポイント…❸
3. 会議の運営に必要な視点……❹
4. 会議の運営・進行……❺
5. 会議でやるべき事をわかりやすく…❻
6. 協議体のさらなる発展に向けて…❽

2019年3月

地方独立行政法人
東京都健康長寿医療センター

はじめに

地域で重層的な助け合いをつくるための協議体

2015年度より地域で支え合うために、住民主体の助け合い活動が推進され、生活支援コーディネーターの配置と協議体の設置が進められています。しかし、地域住民同士のつながりが希薄化した都市部では、住民同士の助け合いに関する意識も薄く、助け合い活動の開発と推進は容易ではありません。

このような背景から東京都健康長寿医療センター研究所・社会参加と地域保健研究チームは、2015年度から2018年度の間、研究開発事業※を実施しました。このプロジェクトでは、下図のように、まずは日常の生活の延長線上で気軽にできる「ちょっとした助け合い」を引き起こし、その体験から踏み込んだ支援につなげ、多世代住民による重層的な助け合いの地域をつくることを目指しました。

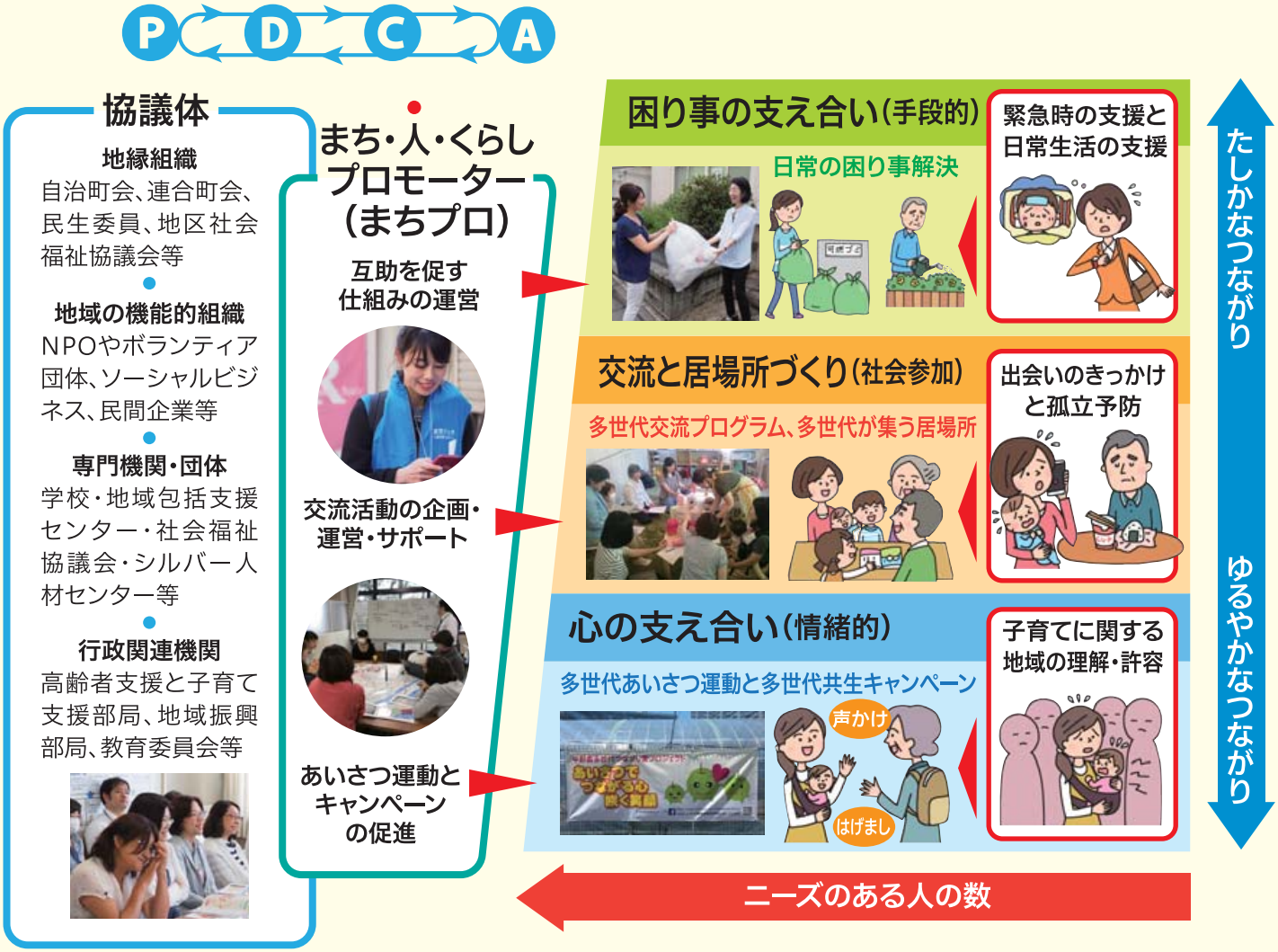
地域で重層的な助け合いをつくるためには、地域の多世代・多分野の住民や団体が、主体的に推進する基盤（プラットフォーム）としての協議体が必要です。

本プロジェクトでは、地域の自治会、民生児童委員協議会、青少年地区委員会、学校と、生活支援コーディネーターが協議体として、下図にある各活動の立ち上げと運営方法を検討しました。また、協議体はこれらの活動の担い手となる地域人材「まち・人・くらしプロモーター（まちプロ）」の育成と活動を支援しています。

このマニュアルでは、多分野・多世代の人・団体で構成される協議体の立ち上げと運営のポイントをご紹介します。

※国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域の「ジェネラティビティで紡ぐ重層的な地域多世代共助システムの開発（平成27～30年度）」（研究代表者：藤原佳典）

<図　重層的なつながりづくりの体制>



1 協議体に関わるそれぞれの役割

まずはそれぞれの役割を把握しましょう

協議体は、下のように様々な人や団体が関わり、それぞれ役割をもって構成されます。

協議体

ボランティア・地域団体が活動の立ち上げと運営に必要な資源を得られるようにすること。

<例>・多世代交流の場を開設したい住民団体に対して、安価または無償で会場を提供する人や団体を紹介する
・活動の広報を支援する

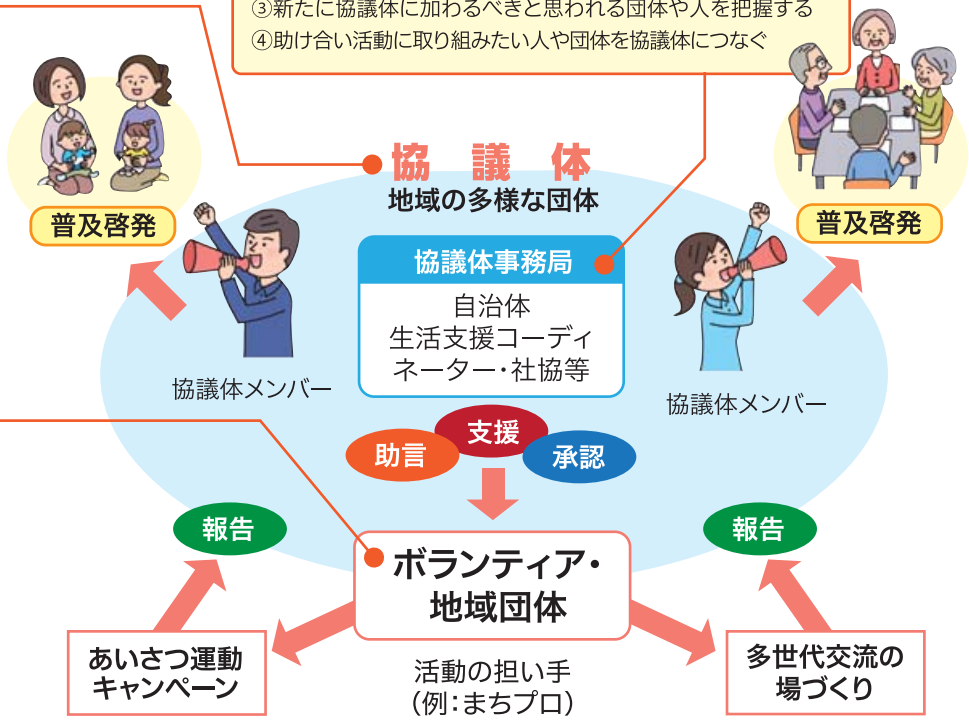
協議体事務局

生活支援コーディネーターなどが下記のような役割を担います。
①自治体等と連携して協議体を立ち上げる
②事務局として協議体の会議を進行する
③新たに協議体に加わるべきと思われる団体や人を把握する
④助け合い活動に取り組みたい人や団体を協議体につなぐ

ボランティア・地域団体

2ページの図で示したような重層的な助け合い活動を実際に運営していくこと。

<例>・自治会・町内会や青少年地区委員会が地域に助け合いの意義を普及啓発するあいさつ運動を各団体の活動の一環として展開していくこと
・ボランティアらが新たに多世代交流の場を立ち上げ、助け合いを推進すること



2 協議体メンバーを集めるポイント

必要な人・団体をそろえて、しなやかな協議体を目指しましょう

協議体を構成するメンバーは、2ページの図に示すような助け合い活動の立ち上げや運営に必要な協力体制を以下の視点から考えることで、それに必要な人・団体が見えてきます。

協議体に参加して欲しい人や団体に対して、協議体の目的と地域での役割について丁寧に説明します。協議体が目指す地域像について共感を得た上で、参画していただくことが望ましいでしょう。

人選にあたり
充分に検討しておくこと

①その活動を立ち上げる/運営するに際して、協議体からどのような協力体制が必要か
②なぜその協力体制が必要か
③その協力体制の中で、特定の人・団体にはどのような協力を期待したいか

生活支援コーディネーターの役割

生活支援コーディネーターは日頃から、地域の多様な人と話をしています。その際に、相手の地域や助け合いに関する思い、持っているネットワーク等に関する情報を丁寧に収集し、アセスメントシート等にまとめておきます。それにより、新たな地域活動に取り組む際に、協議体に誰を誘うかを考えやすくなります。

3 会議の運営に必要な視点

事業を実施するために立ち上げられた協議体が行う会議では、地域の課題や課題解決のための具体的な活動内容などが議論されます。一つ一つの会議を、目的を持った生産的な会議にすることが重要です。

次の4つの視点を意識して会議に臨みましょう

1 目的を常に意識した会議

「今日はなんの会議だっけ？」あなたの担当する会議にこんな発言をする人がいたら、それは会議をすることが目的になっている会議です。事務局が決めた議題にそって一方的な説明だけをする会議では、地域の課題を解決できません。目的を常に意識できるよう、事業の目的を見える化することが必要です（6～7ページ参照）。

2 自主的な意識を持った会議

行政の所管部署や専門職がいわゆる「事務局」として会議の進行や資料の準備を全て担う会議は、事務局側と地域住民側双方にとって進めやすい会議かもしれませんが、必ずしもそれが地域の課題解決につながる会議になるとは言えません。参加住民が自由に、自発的に発言する意識と、運営にも主体的に関与するよう促すことが重要です。

3 柔軟な体制からなる会議

地域の自治会長や団体の代表から構成された会議メンバーは、地域のあらゆる課題解決にあたっている現状があります。信頼性はある一方、情報や意見が偏ります。協議体が立ち上がった後も、常に目的達成のために必要であれば新しいメンバーを追加し、出入りが柔軟な体制づくりが必要です。ただし、メンバーの追加には、目的をメンバー全員で確認すること、新しいメンバーがいかに貢献できるかを共有してから進めます。

4 成果の見える会議

継続的に行われる会議だからこそ、会議での話し合いの成果が見えるようにしましょう。些細な変化、地域で聞かれた声など、1回毎の会議で何か事業が進んでいることを感じられるポジティブな成果を伝えることが大切です。

4 会議の運営・進行

よりよい会議にするための3つのステップ

年齢や立場、バックグラウンドの異なるメンバーが一堂に会する会議の場において、円滑に議論を進行し、目標に向かって意思決定をするためには、以下のように、会議前・当日・終了後それぞれの過程で様々な準備や工夫が必要となります。

STEP ❶ 会議前の準備
- 議題とスケジュールを組み立てる
- 会議の到達目標を設定する

▶

STEP ❷ 会議当日
- 前回までの内容と当日の議題、目標を確認する
- 全参加者から多角的に意見を求める

▶

STEP ❸ 会議終了後
- 到達目標をどの程度達成できたかを振り返る
- 参加者にアンケートを実施する

STEP❶ 会議前の準備　議題と到達目標を設定する

まずは、当日話し合う議題とスケジュールを組み立てましょう。前回までの会議の内容や、その後の進捗状況をもとに、直近で検討が必要な議題と優先順位、おおよその時間配分を決めます。このとき、コーディネーターは、その日の会議の到達目標を定めておくことが重要です。会議ごとにスモールステップで目標設定を行うことで、その時々の進展と課題が明確になります。

ただし、実際の会議の場では、参加者から予期せぬ発言が出てきたり、その影響で当初話し合われるはずだった議題自体が変わっていく場合もあります。コーディネーターは常に様々な可能性を想定し、当日の参加者の反応にあわせて臨機応変に対応する姿勢が求められます。

STEP❷ 会議当日　具体性と公平性を持って話し合う

議論を始める前に、前回までの決定事項を要約して伝え、その日に話し合う内容と目標を確認しましょう。会場では、前回の板書や周辺地域の地図、ロジックモデル（後述）などを掲示しておくと、議題にあわせて参照することができて便利です。

会議を円滑に進行する上では、各議題について参加者がいかに具体的なイメージを持って話し合うことができるかが重要なポイントとなります。“5W1H”（「なぜ」その取り組みが必要なのか、「誰が」・「いつ」・「どこで」・「何を」・「どのように」実行していくのか）を意識して検討事項を提示することで、取り組みの実現に向けたプロセスが明確となり、参加者も意見を出しやすくなります。また、多角的な意見を集約するためには、参加者の立場を問わず、万遍なく発言ができるような雰囲気づくりにも留意しましょう。

STEP❸ 会議終了後　振り返りを行う

会議終了後は、当日の内容について必ず振り返りを行いましょう。当初想定していた到達目標と照らし合わせて、それらをどの程度達成できたか、達成できなかった場合はその理由や、次回以降の会議に向けてどのように準備を進めるかを考えます。

コーディネーターの振り返りのために、毎回の会議終了後、参加者に対して簡単なアンケートを取ることも有効です。アンケートでは、当日の協議内容に関する理解度や、時間配分および進行の適切さ等について評定を求めると同時に、各参加者が自由に意見・感想を記入できるようにスペースを用意しておきます。時間内に話しきれなかったことや、全体の前では表立って発言することが難しかったことが記述される場合もあり、次の会議の議題および目標の設定に役立つだけでなく、各参加者へのフォローもしやすくなります。

5 会議でやるべき事をわかりやすく

地域住民や地域に根ざした組織のメンバーが集まる会議では、目的がさまざまな解釈をされる傾向があります。解釈が異なったまま話し合いを進めていくことは、事業が計画的に進捗しなかったり、頓挫する要因となることがあります。参加者が同じ目標を同じ視点で理解し共有するには、目標を階層的に可視化することが重要です。

何から手をつけていいかわからない、どこから始めていいのかわからない‥　そんなときは
目的の階層化とロジックモデルを作成して、可視化しましょう

ポイント1. 目的を階層化する

目的の階層化の狙い

目的の階層化は、実施しようとする事業や活動の目的を主目的として設定し（レベル3程度）、そのためにはどんなことを達成し、その後どのような目的が達成可能かを上下のレベルに書くことによって、今回の目的がどのような意義を持っているかをより明確にすることが出来ます[1)]。

階層化のメリット

①関わる人たちがやるべき事、何のためにやるのかを理解しやすくなる
②説明しやすくなる
③定期的に振り返るベースとなる
④評価すべきことがわかりやすくなる
⑤目的を達成した後、新たな目的と取り組みに移行しやすい
⑥やるべき事と、やらない事を明確にできる
⑦やりたい人をやる気にさせる
⑧やりたくない人は、やっぱりやりたくないことがはっきりわかる

作成してみよう！

右記のように、始めようとする活動や事業をレベル3として設定し、なぜそれが必要なのかと具体的にやるべき事を記述します。レベル2にはレベル3を実施するために必要な事の目的と、具体的にやる事を記載し、レベル4にはレベル3が達成できた後にすべき事の目的と、やるべき事を記入します。

レベル5（未来の姿）	最終的な目標
レベル4（将来的な目的）	目的＋取り組み（○○のために、△をする）
レベル3（主たる目的）	目的＋取り組み（○○のために、△をする）
レベル2（すぐに行える事）	目的＋取り組み（○○のために、△をする）
レベル1（既に行われている事）	※すでに地域で行われている活動でレベル3につながる事をレベル1として記述する。

目的の階層化が難しい原因とその対処

課題が明確ではない	・その課題は誰が、どのような状況にあることが問題とされているか明確になっているかを確認する。 ・現象（例：人が集まらない）ではなく、その集まらない原因（見込みであっても）まで明確にする。
課題が絞り込めていない	・課題が複数の課題を含んでいる場合、取り組みも複数になってしまうので、優先的に取り組むべきこと一つに絞り込む。
目的の前後関係（レベルの上下）がわからない	・レベル2とレベル4を合わせて見ながらレベル3を考えてみる。 ・どの順序がもっともその課題を解決しやすいか（啓発→単発イベント→居場所→助け合いなど）を考えてみる。

1) Gaynor, A. K. & Evanson, J. K. (1992). Project Planning; A Guide for Practitioners. Boston, Mass.: Simon & Schuster

ポイント2. ロジックモデルをつくる

ロジックモデルをつくることの狙い

ロジックモデルは、資源として存在するもの、具体的に導入する事業や活動、成果や、短中長期的なアウトカムを連動させて事業の流れを示すものであり、その目的は事業の効果の関連性を図式化するものです[2)]。地域のアセスメントは、地域の課題や資源を明らかにしますが、それらを効果的に活動や事業に活かし、継続的にマネジメントしていく必要があります。また、それらの活動や事業が長期的に事業目標の達成につながっているかを確認する必要もあります。こうしたマネジメントと評価の機能としてロジックモデルを使うことが有効です。

< 目的の階層化とロジックモデルの関係性 >

目的の階層化	ロジックモデル
目的の階層化は課題から取り組むべき活動や事業の目的に特化することにより、目的および取り組むべきことを整理しやすくします。	・ロジックモデルは、目的（アウトカム）に合わせて、具体的にすべき事業をより明確にする。 ・ロジックモデルは、直接の結果を特に数字的に示すことにより、事業の評価がしやすくなる。
▶事業の検討や初期段階で効果的。 ▶住民との会議で説明しやすい。	**▶初期から中長期の継続的な利用と見直しが可能。 ▶専門職による継続的な評価や説明の際に有効。**

作成してみよう！

下の各項目をそれぞれ記入し、ロジックモデルを完成させましょう。

今 → 2〜3年後 → 5〜10年後

アセスメント		活動・事業 プログラム・ プロジェクト	直接の成果 アウトプット	短期的効果 アウトカム	中・長期的効果 アウトカム
課題	資源 インプット				
アセスメントによって明らかにされた、地域の課題、ニーズや資源（インプット）		アセスメントをもとに、目的に沿って実施する活動や事業	直接の成果（アウトプット）とは、活動や事業の結果生まれる新たな地域人材の創出であったり、常設のサロンのような拠点数、講座の回数などである（数字で表現されることが多い）	・短期的効果（アウトカム）とは、実施する活動や事業の直接の結果によってもたらされる効果（ある状況の変化、健康度、ソーシャルキャピタルなど） ・中・長期的効果（アウトカム）とは、活動や事業が継続されたり、新たな活動や事業が生まれることによって期待される将来の効果	

ロジックモデル作成のチェックポイント

- □ 取り組むべく課題は明確ですか、絞りこめていますか？ なぜそれを問題だと思いますか？
- □ 取り組み（事業）は、課題の解決に対して適切ですか？
- □ 取り組みから生まれる直接の成果（アウトプット）に漏れはありませんか？
- □ アウトプットから短期アウトカムが見込まれますか？
- □ 評価すべきアウトカムの項目は明確ですか？評価方法がイメージできますか？
- □ 短期的なアウトカムから中長期アウトカムが十分期待されると思いますか？

2) Brownson, R. C., Baker, E. A., Leet, T. L., Gillespie, K. N., & True, W. R. (2011). Evidence-Based Public Health, Second Edition. New York: Oxford University Press, Inc.

6 協議体のさらなる発展に向けて

1 協議体の活動報告イベントの開催

地域住民を対象としたフォーラムやシンポジウムなどを開催し、協議体の運営基盤の強化や助け合いのある地域づくりを図ることもできます。

開催の意義

①協議体に参加しているメンバーの結束を強めたい
②各協議体メンバーの母体組織にも協議体の意義を浸透させ、助け合いのある地域づくりの活動を各組織で進めたい
③協議体が目指す地域像を広く地域住民に知らせ、協議体に新たなメンバーを取り込みたい、助け合いの活動に新たな地域団体や人材を取り込みたい

開催の準備のポイント

①協議体参加メンバー間で開催の意義を議論し共有する
②周知を協議体メンバーが行うことにより、協議体メンバー内に協議体の目的が浸透する
③コーディネーターが日ごろの地域アセスメントの過程で知り合った人にも参加を求めることで新たな人や団体を協議体に取り込みやすくなる

2 街頭アンケートにより地域の声を知る

協議体での議論を通して、地域課題や「地域にあると良いこと（例、通いの場等）」に対する意見が出るでしょう。これらの意見が本当に地域のニーズや意見なのかを知るためにも、協議体メンバーと共に街頭アンケートをすると良いでしょう。

街頭アンケートの手法の一つとして、地域のイベントやお祭りにて、協議体メンバーと共に街頭アンケートをしてみてはいかがでしょうか。

下記のようなプロセスを通して、協議体メンバーは、会議外で地域の声を知ると同時に、自分たちの活動の重要性を再認識することにも役立ちます。

街頭アンケートの手法の例

①「この地区で欲しいもの」6つをボードに記します。
- 多世代が交流できる場
- 子供が安心して遊べる場
- 高齢者が気軽に集える場　など

②協議体メンバーと住民ボランティアがイベント参加者にボードを見せながら尋ねます。
③イベント参加者は「欲しい」と思うものにシールを貼っていきます。

▲地域イベントでのアンケートの様子（多摩区中野島地区）

多世代共創社会のまちづくりマニュアル
～協議体編～

発行：地方独立行政法人　東京都健康長寿医療センター
印刷：株式会社　社会保険出版社
無断転載・複製を禁ず

お問い合わせ先
地方独立行政法人　東京都健康長寿医療センター研究所
社会参加と地域保健研究チーム
〒173-0015　東京都板橋区栄町35番2号
TEL：03-3964-3241

本マニュアルは、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域の「ジェネラティビティで紡ぐ重層的な地域多世代共助システムの開発（平成27～30年度）」（研究代表者：藤原佳典）による研究成果の一部である。

UD FONT
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。